

# 1 流れる風景の なかに降り立つ

【あぶくまがわ】  
那須山系の旭岳を源流として、  
全長は約239kmに達する。  
北上川に次ぐ東北第2の大河である。

かな水をとたえて悠々と  
流れる阿武隈川。この大  
河に寄り添うように、柴田町  
南部の下名生・槻木・四日市場  
の三地区が広がっています。  
全長二二九キロメートルのう  
ち、柴田町が阿武隈川に接する  
距離は約四キロメートルですが、  
長さでは計れない大切な“ふる  
さとの川”。多くの  
水の恵みを与  
え、暮らしを支え、  
歴史を見つめて  
きました。



かつて阿武隈  
川の舟運が盛ん  
だった時代、荷を  
満載した船は下名生から槻木  
を過ぎ、さらに川を下って四日  
市場へ。「道中往来」に「槻木の  
土手」とうたわれた堤防の向こ  
うに見えた帆掛け舟の白い帆は、  
今も川沿いに住む人々の記憶に  
あります。

また、阿武隈川と白石川が  
合流する槻木は、江戸時代には  
奥州街道の宿場  
町として栄えた  
ところ。雨乞いの  
「濡れ薬師」の伝  
説が伝わる久須  
志神社があり、  
神社の祭礼で奉  
納される「槻木  
木やり」が昭和三十九年に復  
活して、先人の貴重な文化を受  
け継いでいます。

この槻木に平成七年、阿武隈  
川に架かる槻木大橋が完成。  
柴田町と対岸の角田市・亘理町  
を結ぶ交通路線が整備され、両  
岸市町の交流もさらに深まって、  
新たな繁栄の礎となっています。



- ① 洋々と流れる阿武隈川。  
暴れ川であったが多くの恵みをもたらしている
- ② 阿武隈川と白石川の合流点。白幡橋の西に上野山、  
その西に蔵王連峰が広がる
- ③ 河川敷にはグラウンドが整備され、  
野球などのスポーツを楽しめるようになった
- ④ 空と川面がオレンジ色に染まった阿武隈川の夕景



## view of the river 阿武隈川

緑輝くみちのくの大地に悠然と横たわる、東北第二の大河・阿武隈川。  
遠く那須山系に生まれた一滴が、幾筋もの流れを集めて成長し、広い海をめざす。  
北へ北へと長い旅をつづけてきた阿武隈川は、ここ柴田町で東へ進路を変え、  
やがて夢に見た希望の海・太平洋へと辿りつく。  
それは、川と海が一つになって新しい生命を未来につなぐ、悠久の物語だ。



## 流れる風景の 2 なかに降り立つ

[しろいしがわ]  
蔵王山系を源として全長約70km。  
その周辺は豊かな自然環境をもち、  
冬には越冬のためハクチョウも飛来する。

### 船

岡・船迫から槻木・下名生へ、町の中央部を貫流する白石川。流れを辿れば、はるか昔からの川の記憶が町の歴史に重なり、時の浪漫と美しい風景が小さな旅へと誘います。

春、大正時代に植えられた白石川堤沿いの一目千本桜や、近くの船岡城址公園の九〇〇本の桜が満開に。遠く残雪をいただいた蔵王連峰を背景に、春の夢のように咲き誇る華やかな景色は、日本の「さくら名所百選」に選ばれています。小高い丘陵にある船岡城址公園は柴田家の居城跡で、山本

周五郎の小説『縦ノ木は残った』の主人公・原田甲斐の館跡でもあった場所。秋には三の丸跡会場に「しばたの菊の祭典」が開かれ、全国から多くの人が訪れます。また、公園の麓には、歴史や文化を伝承する複合施設「しばたの郷土館」があり、柴田町の過去・現在・未来を紹介。郷土の心を伝えています。



2

国道四号と並んで流れる白石川を、さらに東へ。さくら船岡大橋を過ぎると、次第に県内屈指の工業の町としての姿が見えてきます。とくに阿武隈川との合流点に近い神明堂工業団地は、多くの企業が進出する産業基地。白石川は、飛躍をつづける町の未来を見守っているようです。



3



4

- ①冬の足音がすぐそこまで迫り、樹木が紅葉した秋の白石川一帯
- ②春から冬のあいだ、白石川を拠点に活動する仙台大学漕艇部
- ③4月中旬、白石川堤では一目千本桜が満開となる
- ④鮎の解禁日を迎えると、たくさん釣りが、白石川を訪れる



view of the river

# 白石川

蔵王山麓を源に、松川を合わせて柴田町に入る母なる川・白石川。  
静かに時を刻み、四季折々の姿を川面に映しながら町を貫いて、ゆったりと流れる。  
豊かな水が肥沃な土地をもたらし、かつて人や文化が往来した川の道—  
白石川はいつの時代にも、慈母のような優しい眼差しで、人々の営みを見守ってきた。  
変わらずに流れる川のある町に暮らし、この川とともに季節を巡る幸せを思う。



# 3 流れる風景の なかに降り立つ

【ごけんぼり】  
江戸後期に農業用水路として開削し、  
その後は排水路として改良事業を実施。  
人々の努力の結晶がいまの五間堀の姿。

し、海老穴から入  
間田を経て四日  
市場を流れて岩  
沼市へ。記録では、  
五間堀の幅は明  
治十七年当時、  
上流の成田で四・



2

その後、幾度と  
なく洪水に見舞  
われましたが、戦  
後になってようや  
く五間堀沿岸の  
排水改良事業に  
着手。昭和二十六

**霊** 峰蔵王を仰ぐ米どころ  
宮城の県南に、昭和三十  
一年、船岡町と槻木町が合併し  
て誕生した柴田町。その旧槻木  
町のほぼ中央を東流する五間  
堀は、その一部はすでに「風土記  
書上」（二七七八年）に見られま  
すが、江戸後期に用水路とし  
て整備されました。

五メートル、下流の四日市場で  
は最も幅の広いところで八・二メ  
ートルであったと記されています。  
五間堀は当初、用水路とし  
て使われ、流域ではこの水路か  
ら田に水を引いていました。そ  
れが明治になって、槻木地域の  
水田が毎年のように洪水に襲  
われたため、排水路としての役  
割が大きくなっていったのです。



3

年に本格的な排水機場が完成  
し、昭和四十六年には槻木地  
域の五間堀を高位部排水路と  
低位部排水路に分ける工事が  
竣工して、完全な排水路の機能  
が整いました。  
いま五間堀は、長い年月、水  
と闘ってきた人々の強さを無言  
のうちに語りかけています。



4

- ① 田畑のなかを流れる五間堀  
江戸時代に農業用水路として造られた
- ② 五間堀には多くの魚が集まり、近くに住民たちは  
ナマズやウナギなどを捕って楽しんだ
- ③ 五間堀付近から望む蔵王は、  
宮城蔵王36景に選ばれている
- ④ 戦後、数度にわたる工事により、  
五間堀は排水路として完全に整備された



## view of the river 五間堀

高く澄んだ空、さわやかな秋風に揺れて輝く黄金色の稲穂の波—  
豊かな稔りの陰には、自然の猛威に立ち向かい水と闘った長い歴史が秘められている。  
江戸の昔に拓かれたという五間堀は、田を潤し、大水から稲を守った水の道。  
その流れに脈々と生きつづける先人たちの魂は、時を超えて心を揺さぶり、  
耳を澄ませば、この地を愛し生きた人々の思いが聴こえてくる。